

# 自己の将来像を見据えて 継続して英語を学ぶ態度を育てる授業づくり

— 英語の活用場面を考えさせる活動を通して —

大竹保幹<sup>1</sup>

グローバル化が急速に進展する中で、どの生徒にとっても、外国語によるコミュニケーション能力は生涯にわたる様々な場面で必要であると想定されている。将来を見据えて継続的に英語を学ぶためには、英語と生徒の将来像を関連付けた動機付けが大切である。そこで、将来の英語活用場面を考え、共有する活動を行った結果、将来の英語使用を意識させることが、英語学習の動機付けを高める一因となることが分かった。

## はじめに

グローバル化の進展に伴い、「国際言語」としての英語使用の必要性は年々増してきており、将来の様々な場面で英語を使ったコミュニケーションをする機会があることが予想されている。一方で、ベネッセ教育総合研究所(2014)によれば全国の高校生の約半数は、将来、自分が英語を使ってコミュニケーションすることはないと考えているという。

一般的に、日本のような「EFL環境(外国語として英語を学ぶ環境)」では、授業以外の場面で実際に英語を使用してコミュニケーションする機会は少なく、英語を使う自己の将来像をイメージすることは難しい。そのため、このような環境においては、英語学習は「大学入試」や「検定試験」が目的になることが多く、目的が達成されると、それ以降、学習を止めてしまう可能性が高い。生涯にわたって英語学習が継続されるためには、他の視点から動機付けを行うことが鍵となると考えられる。

「論点整理」(中央教育審議会 2015)では、生徒の学びへの興味や努力し続ける意志を喚起するため、実社会や実生活に関連付けた動機付けが必要であるとしている。その後、特に外国語教育では、生徒が将来の進路や職業などと結びつけて「主体的に学習に取り組む態度」を育むことが重要であると整理された(中央教育審議会 2016)。

外国語科においては、社会や生徒の将来と関連付けた授業展開や主体的に学ぶための動機付けを意識した授業づくりが求められているといえる。

そこで本研究では、「生徒の将来像」に焦点を当て、英語学習の動機付けを目的とした授業改善の効果を検証した。

## 研究の目的

本研究の目的は、授業で学習した内容と将来の英語使用に関連付けさせる活動が、英語学習の動機付けを高めることにつながるかを検証することである。

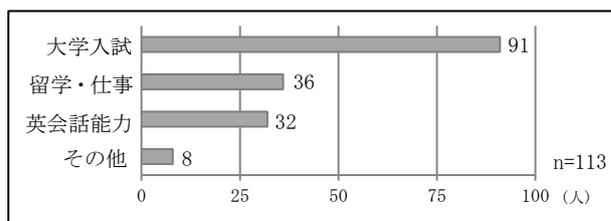
## 研究の内容

### 1 研究の背景

所属校生徒の英語学習動機の実態を把握するため、平成28年6月に3年生113名を対象に記述式のアンケート調査を行い、「英語学習の主な理由」と「将来の英語使用イメージ」を記述回答に基づいて分類した。

#### (1) 英語学習の主な理由

約8割の生徒が英語学習の主な理由として挙げたのは「大学入試」であった(第1図)。



第1図 英語学習の主な理由

「留学・仕事」など将来的な必要性のために学習しているという記述もあったが、半数以上が「大学入試」のみを回答している。

「大学入試」のために英語学習に取り組むこと自体は悪いことではない。しかし、一つの動機に支えられた学習は、その目的が達成した、あるいはしなかった途端に効力を失ってしまう。そのため、一つの動機だけではなく複数の動機に支えられている状態が理想であると考えられている(小嶋他 2010)。たとえ一つの動機が弱くなったとしても、他の動機が学習を後押しすることで、学習の継続性につながるためである。

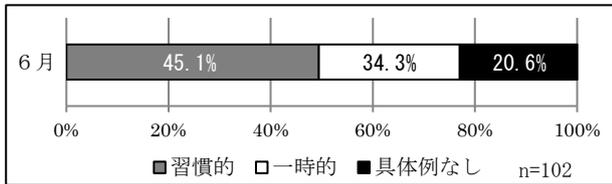
その点で、所属校生徒は英語学習の動機が限られており、授業の中で多様な学習動機を与えることが必要

1 神奈川県立厚木高等学校  
研究分野(授業改善推進研究 外国語(英語))

だといえる。

## (2) 将来の英語使用イメージ

「将来、自分が英語でコミュニケーションすることがあると思うか」という質問に対し、所属校生徒の9割近くが「はい」と回答し、将来の英語使用を肯定的に捉えていることが分かった。ところが、その理由を分析してみると英語使用イメージには大きな差があることが明らかになった(第2図)。



第2図 将来の英語使用頻度

生徒の記述から将来の英語使用イメージを、使用頻度ごとに三つに分類した。「習慣的」とは、仕事や日常生活などで定期的または頻繁に使うと予想しているものである。一方、道案内や海外旅行など不定期の使用や、あまり頻繁に使わないと回答しているものを「一時的」として扱った。「グローバル化が進んでいるから」や「英語は世界共通語だから」のように、将来的な英語使用は否定していないものの、自分がどのように使うかを具体的に説明できていない回答は「具体例なし」とした。

「一時的」と「具体例なし」の合計が54.9%であることから、将来の英語使用頻度が低いと考えている生徒、または漠然とした使用イメージしかない生徒が半数以上いることが分かった。

## 2 先行研究における「動機付け」

### (1) 自己決定理論

#### ア 自己決定理論とは

外国語学習において「自己決定理論」という動機付け理論が近年注目を集めている(小嶋他 2010)。

この理論では、「外発的動機に基づく行動」であっても、学習者がその行動の価値を内在化することによって、「内発的動機に基づく行動」へと変容していくと考えられており、この内在化や自律性(自己決定性)の程度によって動機付けを大きく五つの調整段階に分類している(第3図)。



第3図 動機付けの調整段階

(小嶋他(2010)を基に作成)

行動が全く自己決定されていない「無動機」に始まり、自己決定性の程度が低い順に、「外的調整」、「取入

的調整」、「同一視的調整」、「内的調整」の段階があるとしている。また、各調整段階が想定する学習者の姿は次のようにまとめられている(第1表)。

第1表 各調整段階が想定する学習者の姿

無動機	勉強は時間の無駄だ
外的調整	テストがあるから勉強する
取入的調整	将来困りそうだから勉強する
同一視的調整	将来のためには勉強は大切だ
内的調整	勉強そのものが楽しい

※田中・廣森(2007)を基に作成

#### イ 動機付けの先行要因

自己決定理論では、内発的動機付けを高める先行要因として、三つの「心理的欲求」の充足が必要であるとしている(第2表)。

第2表 内発的動機付けを高めるための心理的欲求

自律性	自分の行動が自己決定的でありたいという欲求
有能性	自分の能力を顕示する機会を持ちたいという欲求
関係性	他者と友好的な連帯感を持ちたいという欲求

※田中・廣森(2007)を基に作成

田中・廣森(2007)は、この三つの「心理的欲求」を同時に満たす学習活動を実践することで、程度に個人差はあるものの、内発的動機付けを高める働きがあるとしている。

### (2) L2セルフシステム理論

外国語を使う理想の自己という概念から学習者の動機付けを説明している「L2セルフシステム理論(L2 Motivational Self System)」が、英語教育に応用され始めている(小嶋他 2010)。

この理論では、外国語を使う自己の将来像と、外国語がうまく扱えない現在の自己との相違を埋めようとする欲求から動機付けがされるとしている。

自己の将来像は大きく二つに分類される。一つは自分が将来なりたいと期待する姿である「理想自己(ideal L2 self)」。もう一つは、ならなくてはいけないという義務感や不安感から想像する姿である「義務自己(ought-to L2 self)」である。

### (3) 自己決定理論とL2セルフシステム理論の関係

二つの自己の将来像は、自己決定理論における動機付け調整段階と関連がある。特に、「理想自己」は自己決定性の程度が高い動機付け(「同一視的調整」と「内的調整」)、「義務自己」は自己決定性の程度が低い動機付け(「外的調整」と「取入的調整」)に影響を与えるとしている。

## 3 研究の構想

### (1) 仮説

これら二つの理論から、自分自身が英語を使う将来像を持たせることで、英語学習に対する内発的動機付

けが高まることが考えられる。そこで、本研究では次の仮説を立て、それを検証した。

将来の英語使用場面を生徒が自ら考え、教室内で共有する活動を繰り返し行えば、生徒の英語学習に対する動機付けが高まるだろう。

#### (2) 期待される生徒の変容

予備調査の結果から、所属校生徒の多くは「大学入試」を英語学習の目的とした「外的調整」が高い状態にあることが分かる。しかし、英語学習の継続性という点では、「大学入試」だけでなく他の複数要因からも動機付けがされている状態が理想の姿である。そのため、検証で設定する活動によって、「無動機」と「外的調整」以外の動機付け段階が高まることを期待した。

特に、今回の検証では将来の英語使用場面を考えさせる活動を実践することから、将来への期待や不安等と関係の深い「同一視的調整」と「取入的調整」が高まると考えた。また、活動において繰り返し英語使用場面を考えることから、将来の英語使用イメージはより具体的になることも予想された。

### 4 検証の手立て

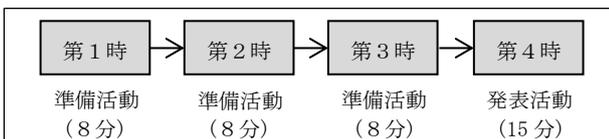
#### (1) 授業中の活動

ア 『言語活用ガイド』づくりとは

検証授業において「『言語活用ガイド』づくり」という活動を設定した。これは、各自で考えた将来の英語使用場面を生徒作品集としてまとめ、教室内に掲示する活動である。

この活動は、既習の言語材料と将来の英語使用を関連付けさせ、個人の英語使用イメージを高めるだけでなく、その活用アイデアを教室内で共有することで、一人では思い付かないような活用例に気付かせることをねらいとしている。

一つの単元を4回の授業で行う場合は、第1時から第3時までを、各時で学習する言語材料を用いて将来の英語使用場面を考える準備活動の時間に充て、単元終了時である第4時に発表活動を行うこととした(第4図)。



第4図 1単元内における活動の進行イメージ(例)

「継続的に英語を学ぶ態度を育てる」ためには、一時的ではなく、長期的な視点で生徒の動機付けを高めていくことが必要不可欠である。そのため、どの単元においても導入が可能な10分程度の帯活動として設定した。このことにより、毎時間活動を繰り返し行うことができ、生徒が英語と将来を関連付けて学習することが習慣化できると考えた。

また、各活動の中で自己決定理論における三つの「心理的欲求」を充足させる手立てとして、「課題やテーマを生徒が決める」、「発表をする」、「ペアやグループとなり協働学習をする」という工夫を取り入れることにした。

#### イ 準備活動

準備活動では、授業中に学習した言語材料(新出語彙・熟語など)が、将来のどの場面で活用でき、そのときどのようなセリフを言うことになるかを個人で考えさせた。さらに、将来の英語使用場面として、職場や家庭内など、生徒自身が英語を使うと想像できる場所や状況もワークシートに記入させ、その後、ペアで互いの活用アイデアを共有させた(第5図)。

New Language Items	How to apply to your future life
	<i>Your idea</i>
	<i>Your partner's idea</i>

第5図 準備活動用ワークシート(一部)

単元内において準備活動を繰り返し行うことで活用アイデアが数多く蓄積され、発表活動に使用するセリフを複数の中から選択できるようにした。

この協働学習により、一人では思い付かなかった新たな活用例に気づき、その結果、将来の英語使用イメージが高まるのではないかと考えた。

#### ウ 発表活動

まず、蓄積した活用アイデアの中から「言語活用ガイド」に載せたいセリフの一つを選び、それを使用した会話例を個人で考えさせ、会話例の設定理由についてもワークシートに記入させた(第6図)。

Language Application Guide
Situation :
Reason :
My Example :

第6図 発表活動用ワークシート(一部)

その後、ペアで互いの会話例を確認し、表現内容や文法等の誤りを互いに指摘させた。確認後は登場人物の役を割り振り、音読を行わせた。

発表は、ペア2組を合わせた4人のグループで行わせた。グループ内で進行役を決め、使用場面や設定理由を説明した後、それぞれの会話例をペアで実演させ、感想を簡潔に伝えさせた。

なお、準備活動と発表活動は英語で話し合うことを基本とするが、将来の英語使用場面を考えることが主な目的であることから、コミュニケーションに支障のある場合には日本語を使ってもよいものとした。

#### エ 言語活用ガイド掲示

発表活動後、ワークシートを回収し、それを冊子に

まとめたものを「言語活用ガイド」として教室に掲示した。生徒がこの冊子をいつでも参照し、他の生徒の作品に自由に触れることができるようにした。このことによって、生徒自身の将来の英語使用の可能性がさらに広がることを期待した。

また、単元が終了する度に冊子が増えていくため、活用アイデアが蓄積されていくこともねらいとした。

## (2) 検証の効果測定

動機付けの変化と将来の英語使用イメージの変化を見取るために、検証授業の実施前と実施後にアンケート調査を実施した。

### ア 動機付けの測定

動機付けの測定に当たっては、先行研究(田中・廣森 2007、田中・前田 2004)を参考にし、動機付け調整段階ごとに各4項目ずつ、合計20項目からなる尺度を作成した。「まったく違う」から「まったくそのとおり」までの6件法で回答を求めた(第3表)。

第3表 動機付け質問項目(一部抜粋)

無動機
<ul style="list-style-type: none"> <li>・なぜ英語の勉強をしなければならないかわからない</li> <li>・英語の勉強は時間の無駄だと思う</li> </ul>
外的調整
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業や進学で必要だから、英語を勉強している</li> <li>・将来、良い仕事に就きたいから、英語を勉強している</li> </ul>
取入的調整
<ul style="list-style-type: none"> <li>・英語を使えないと、将来困りそうだから勉強している</li> <li>・英語ができないと、なんとなく不安を感じることもある</li> </ul>
同一視的調整
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の将来のためには、英語は大切である</li> <li>・英語の会話や書く技能を身につけることは、自分にとって必要だと思う</li> </ul>
内的調整
<ul style="list-style-type: none"> <li>・英語を勉強することで、初めて気づくことがあると嬉しい</li> <li>・英語の映画、洋楽、小説などを理解するのが楽しい</li> </ul>

### イ 将来の英語使用イメージの測定

英語を使ってコミュニケーションする自己の将来像を「将来の英語使用イメージ」とし、その測定では、先行研究(入江 2011)を参考に、計10項目からなる尺度を作成した。動機付けと同様に、「まったく想像しない」から「いつも想像する」までの6件法で回答を求めた(第4表)。

第4表 将来の英語使用イメージ質問項目(一部抜粋)

<ul style="list-style-type: none"> <li>・外国人の友人や同僚と英語で会話をしている</li> <li>・英語を使って様々な国の人と交友関係を広げている</li> <li>・毎日、英語に触れる生活をしている</li> <li>・英語が不可欠な仕事や趣味、社会活動などを行っている</li> </ul>
--

また、将来の英語使用場面の内容がどのように変化したのかを見取るため、予備調査と同様に「将来、自分が英語でコミュニケーションすることがあると思うか」という記述式の質問項目を設けた。

## 5 検証授業

### (1) 概要

【検証期間】平成28年9月26日(月)～10月21日(金)

【対象】厚木高等学校第3学年3クラス(計119名)

【科目】コミュニケーション英語Ⅲ

検証授業の実施を当該科目の担当教諭に依頼し、授業内で「『言語活用ガイド』づくり」を毎時実践した。検証期間中は各クラス2回ずつ発表活動を行った。

### (2) 授業の様子

#### ア 生徒の取組

「『言語活用ガイド』づくり」の導入段階では教師の指示により準備活動や発表活動が行われたが、次第に生徒だけで自主的に発表活動の進行をすることができるようになった。

また、活用アイデアをペアやグループで共有する際には、積極的に英語でコミュニケーションを図り、内容について共感し合う姿が見られた。

#### イ 生徒成果物

ある生徒は、職場で仕事がうまくいかなかった部下に対し、「君の失敗はそんなに深刻じゃないよ」と励ます場面を考えた(第7図)。

A: Oh, do you have any problems? What's up?  
 B: Good afternoon, boss. In fact, I made a problem at work.  
 A: Don't worry. Your failure is not so serious. Take it easy!

第7図 生徒作品例(1)

また、日本人の特徴について尋ねられた際、「日本人は直接的な言い方を避けるんだよ」と説明する場面を考えた生徒もいた(第8図)。

A: I'm going to visit Japan next week, so please tell me what Japanese like?  
 B: Japanese tend to avoid simile.  
 A: Oh, Japanese blur what they want to say

第8図 生徒作品例(2)

会話例の作成に時間制限があったため、綴り等に誤りが見られるが、現実起こり得る場面を想像し、それを上手く描写できている良い例である。このように現実的で具体的な使用場面を考えることが、将来の英語使用を強く意識させるきっかけになると考えられる。

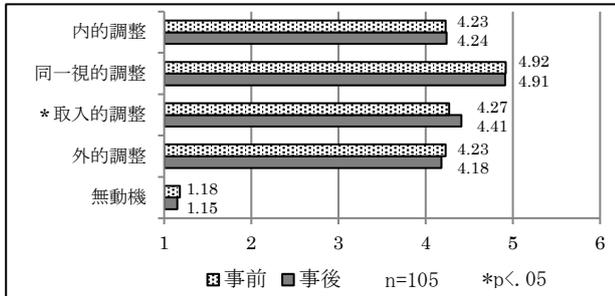
#### ウ 教師のフィードバック

内容に関する肯定的なコメントを教師が記入することで、生徒の学習意欲を高めるよう努めた。会話内容について理解を示すだけでなく、「It is highly possible to use this conversation in the very near future.」(この会話は近い将来使う可能性が高い)のように使用場面の可能性について肯定的にコメントすることが、動機付けを高める一因になると考えられる。

## 6 結果・考察

### (1) 動機付け

事前・事後アンケートの結果から得られたデータの平均値を比較し、動機付けの変化を分析した。数値の差が誤差の範囲でないことを確認するため、t検定を実施したところ、「取入的調整」において差が有意であることが示された(第9図)。



第9図 アンケート結果(動機付け)

「取入的調整」の上昇は、活動を通して将来の英語使用の必要性に気付き、その結果、L2セルフシステム理論における「義務自己」の視点から、将来に対する不安や義務感が生じたためではないかと考えられる。

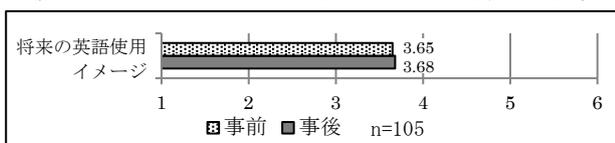
また、動機付けの各調整段階だけでなく、個々の質問項目についても分析したところ、「英語の会話や書く技能を身に付けることは、自分にとって必要だと思う」という「同一視的調整」に関する項目が、5.13から5.30に上昇し、t検定によりその差が有意であることが示された。このことから、生徒が英語の必要性を以前より強く感じてきていることが分かる。

他の動機付け調整段階には有意な変化はなかった。主な原因として、検証期間が短かったため動機付けに大きな影響を与えられなかったことが挙げられる。また、検証対象が3年生であり、大学入試を間近に控えていたことで、将来を見据えた動機付けにつながりにくかったのではないかと考えた。

しかし、「取入的調整」と「同一視的調整」の一部には有意な向上が見られることから、この活動自体には一定の効果があり、学習の初期段階から長期的にこの活動を実践すれば、動機付けや将来の英語使用イメージの変化が表れてくることが予想される。

### (2) 将来の英語使用イメージ

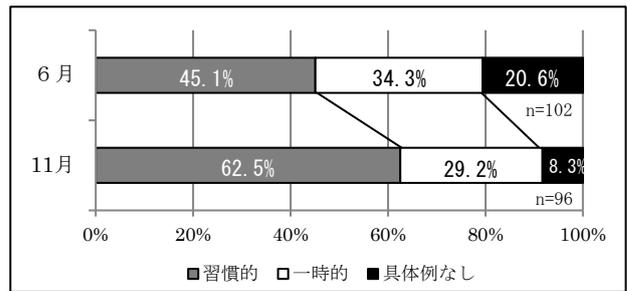
将来の英語使用イメージについても、動機付けと同様の分析を行ったが、数値に高まりは見られるものの、t検定により有意な差は示されなかった(第10図)。



第10図 アンケート結果(将来の英語使用イメージ)

しかし、生徒が想定する将来の英語使用場面についての記述内容を6月の予備調査結果(第2図)と比較したところ、英語使用の内容に大きな変化が示された(第

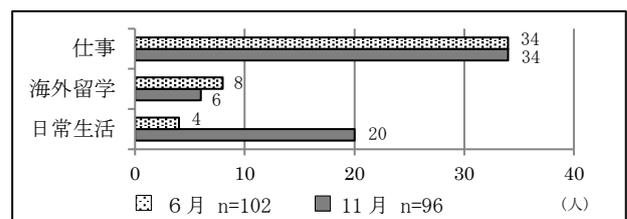
11図)。



第11図 将来の英語使用頻度の変化

第11図からは、「具体例なし」が12.3ポイント減少し8.3%となり、「習慣的」が17.4ポイント増加し62.5%となったことが分かる。これは活動を通して、様々な活用アイデアを得たことで将来の英語使用を具体的にイメージできるようになったためであると考えられる。海外旅行などの「一時的」な英語使用よりも「習慣的」な例が多くなったことは、生徒の将来における英語使用の必要性が増したことを示している。

さらに、「習慣的」の記述内容を詳しく見てみると、仕事等で使用するとしての回答数に大きな変化はないが、友人との会話等、日常生活で使用するとしての回答数は16名増え、20名になった(第12図)。



第12図 将来の「習慣的」な英語使用場面の变化

仕事だけではなく、日常生活の場面と英語を結び付けられていることから、生徒にとって将来の英語使用がより現実的で身近なものになったと考えられる。

この活動により、自身がそれまで気付かなかった将来の英語使用の可能性を広げた例として、ある生徒の記述を紹介する(第13図)。

以前までは、自分の将来の夢は数学教師だから今後英語を使う機会にはほとんどないと思っていた。けれど、考え直すと、教師をすればALTの方々と接する機会もあるかもしれない。そう考える可能性はあるなと思いました。

第13図 生徒の記述回答

この生徒は「以前までは、将来の夢は数学教師だから、今後英語を使う機会にはほとんどない」と思っていたが、活動を通じて「教師をすればALTの方々と接する機会があるかもしれない」と、将来の英語使用の可能性に気付くことができたと回答している。

個人で考えるだけでなく、協働学習をすることで、活用アイデアは一層豊かで具体的なものになる。そして、このように将来の英語使用イメージが具体化することが将来を見据えて継続的に学習する態度につながるものと考えられる。

## 研究のまとめ

### 1 研究の成果

アンケート調査の結果から、動機付けに関して、活動後に「取入的調整」が上昇していることが分かった。また、「同一視的調整」にも一部上昇が示されたことから、今回の活動により英語学習への動機付けが高まったといえる。さらに、多くの生徒が具体的で日常的な将来の英語使用場面を想定できるようになったことから、将来における英語の必要性を以前より感じることができるようになったことが分かる。

今回の検証で得られた結果は、先述した自己決定理論における行動の価値の内在化の過程であると考えられる。そのため、今後このような取組を継続的に実施し、英語を使う「理想自己」を明確にさせていくことで生徒の内発的動機付けが高まっていき、より多くの成果が表れることが予想される。

以上のことから、「生徒の将来像」に焦点を当てた授業を実践することが、生徒の動機付けを高める一因となり、今後の授業改善の方向性として重要な要素となると考えた。

### 2 今後の課題と展望

#### (1) 課題

今回、活動時間を10分程度に設定をしたことで、どの単位においても繰り返し実施することができた。一方で、設定時間が短いため、十分な推敲がないまま発表されるものもあった。活動に慣れるまでは設定時間を長くする、または発表用の会話例作成は家庭学習の中で事前に取り組ませるなどの工夫が必要である。

アンケート調査の結果からは動機付けの上昇は確認できたものの、その程度には個人差があった。田中・廣森(2007)は、特に動機付けが低い学習者に対しては、「やればできる」という気持ちを持たせることで有能感を満たすことが有効であるとしている。多くの生徒が活動に主体的に参加できるようにするためにも、教師の日頃からの働きかけが重要であると考えられる。

#### (2) 学習評価への活用

「『言語活用ガイド』づくり」は準備活動や発表活動の中で、生徒に学習した知識やスキルを使わせることをねらいとしている。そのため、パフォーマンス評価によって取組の様子や成果物などを「表現の能力」の観点の評価基準により評価することが考えられる。

#### (3) 継続的な取組の必要性

英語と将来を関連付ける活動は、継続的に取り組むことで、より大きな成果が表れることが予想される。そのため、活動を学習の初期段階から導入し、学年が進行するごとに活動内容を変化させていくことが望ましい。

例えば、導入の初期段階では活動自体に慣れるため、

「英語の使用場面」や「使用語彙」を限定して会話例を作成させたり、セリフの数を制限したりする方法などが挙げられる。それ以降は、徐々に活動の自由度を上げていき、今回実践したような活動、もしくはより高度な即興型のロールプレイ形式で行うこともできる。

### おわりに

イベント的に設定した特別な活動で、生徒の動機付けが一時的に変化したとしても、それが英語学習の継続性につながるとは考えにくい。そのため、教師の日頃からの働きかけや絶え間ない授業改善が何よりも重要であることを、本研究を通じて痛切に感じた。

今後、多くの生徒にとって英語使用の必要性が増していくことは想像に難くない。本研究が、将来を見据えて英語を学習し、英語を使用して国際社会の中で活躍しようとする生徒の育成に少しでも貢献することを願う。

### 参考文献

- 中央教育審議会教育課程企画特別部会 2015 「教育課程企画特別部会 論点整理」  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf) (2016年4月取得)
- 中央教育審議会教育課程部会外国語ワーキンググループ 2016 「外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」 p. 3  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377057\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377057_1_1.pdf) (2016年8月取得)
- ベネッセ教育総合研究所 2014 「中高生の英語学習に関する実態調査 2014」  
[http://berd.benesse.jp/up\\_images/research/Teenagers\\_English\\_learning\\_Survey-2014\\_ALL.pdf](http://berd.benesse.jp/up_images/research/Teenagers_English_learning_Survey-2014_ALL.pdf) (2016年4月取得)
- 入江恵 2011 「日本人大学生を対象とした Possible L2 Selves(言語可能自己)尺度の開発—予備調査分析結果—」(桜美林論考『言語文化研究』第2号)
- 小嶋英夫・尾関直子・廣森友人 2010 『英語教育学体系第6巻成長する英語学習者—学習者要因と自律学習』大修館書店
- 田中博晃・廣森友人 2007 「英語学習者の内発的動機づけを高める教育実践的介入とその効果の検証」(全国語学教育学会『JALT Journal, Vol. 29, No. 1』)
- 田中博晃・前田啓朗 2004 「外国語学習動機研究における構成概念‘amotivation’:測定の妥当性検証とネガティブな質問項目の影響」(日本言語テスト学会『JLTA Journal(6)』)